

SONRISA
そんりさ Vol.150



メキシコのアフリカ系

グアテマラ・イシュバランケ代表のアマリアさんとショールの数々
(くわしくは「グアテマラ・伝統のピクビル織」をごらんください)

- | | | |
|----|------------------|-------------|
| 02 | メキシコにおけるアフリカ系の人々 | …… 山本昭代 |
| 10 | グアテマラ・伝統のピクビル織 | ……石川智子 |
| 12 | グアテマラの政治状況 | |
| 15 | キューバ映画の魅力 | ……都築仁美 |
| 17 | ニカラグア便り 空手道場 | …… 田中紀子 |
| 18 | ラ米百景 マヤの佇まい | ……伊高浩昭 |
| 19 | 白いハトがやってきたら… | …… 伊香祝子 |
| 20 | ペルー沿岸音楽界の相次ぐ訃報 | ……水口良樹 |
| 22 | 食巡り「牛肉のタコス」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 23 | ニュースクリップ | ……サザエ |

メキシコにおけるアフリカ系の人々 ——沈黙と差別の歴史

Afrodescendientes en Mexico 序章・第1章より要約

マリア・エリサ・ベラスケス, ガブリエラ・イトゥラルデ・ニエト著

はじめに

メキシコにおいてアフリカ系の人々は、先住民族、ヨーロッパ系と並んでこれまで社会の重要な柱のひとつだった。だがそのことは正しく評価されてこなかった。

アフリカの様々な地域から連れて来られた男性、女性、子どもたちは、生まれた土地から強制的に連行され、共同体社会から引き離されて奴隷とされ、新大陸で次々に殺され、これまでその存在は無視され、差別されてきた。それでもその世界観や文化は、アフリカ系の新たな世代に受け継がれ、その貴重な遺産はメキシコの歴史の構築に貢献している。残念なことにメキシコでは人種差別が存在すること自体、依然として認識されていない。よく知られるように、メキシコにおける差別のかたちのひとつは肌の色に関するものである。「2010年度メキシコ差別に関する全国調査」によると、10人のうち4人は肌の色の違いによる差別があると答えている。一方、90%の人々は肌の色で人を侮辱すべきでないと答えているが、80%の人々は実際にはそれが行われていると答えている。70%あまりのメキシコ人は、社会が様々な人種の起源をもつ人々によって構成されていることについて、「良い」あるいは「たいへん良い」と評価しており、半分以上の人々はメキシコ人は文化や価値観が異なっても偉大な国家を構築することは可能だと答えている。

アフリカ系の人々は歴史上のさまざまな時期に国民社会に大きく貢献してきたが、同時に彼らの存在は不可視化され、否定されてきた。ホセ・マリア・モレロス・イ・パボンやビセンテ・ゲレロのような国民的英雄でさえ、アフリカ系の先祖を持つことが隠されていたほどである。

イントロダクション

メキシコとアフリカのいくつかの国々の間には共有する過去がある。だがそのことはごく一部のメキシコ人しか知らず、アフリカやそのほかの地域の人々にはほとんど認識されていない。だがこの歴史は無数の経済的・社会的・文化的交流に反映されており、それは例えば、(メキシコでよく飲まれる)ハイビスカス茶のような日常的なものにも見ることができる。ハイビスカスはアフリカ大陸の原産なのである。

メキシコにおけるアフリカ系の人々の歴史は副王領時代にさかのぼる。当時、市場や広場、教会、工房、宗教行事、ダンス、料理などにおいてナワ、オトミ、マヤといった先住民族とスペイン各地からきた本国人が交流していたが、同時にアフリカ西部のマンディンゴやウォロフ、アフリカ中部のバントゥなどの人々との交流も重要な意味をもっていた。16世紀、メキシコにスペイン人の手によってアフリカの人々が強制的に連れて来られて以来、さまざまな民族集団の言語、習慣、信仰、衣装、民間療法、料理がもたらされた。

人類学者のゴンサロ・アギレ・ベルトランの先駆的な研究(1946年)以来、メキシコの歴史におけるアフリカ人とアフリカ系の人々の参加と貢献についての研究は、とくに過去20年のうちに顕著に増加した。これらの研究によって、メキシコの植民地時代のアフリカ人の経済的・社会的・文化的な貢献の重要性が明らかになり、また独自の文化的特徴を示す今日のアフリカ系の人々の共同体の性格もまた調査された。

しかしメキシコ人の大部分は、このような歴史も研究成果についてもほとんど知識がない。メキシコ

におけるアフリカ人やアフリカ系の人々の過去と現在を知ることがなぜ重要なのか？ それは何の役に立つのか？ まずひとつには、われわれの祖先は誰だったのか、なぜわれわれは特定の肌の色をし、食べ物の好みや歌い方、遊び方といったものを身につけているのかを知る権利があるということである。二つ目には、アフリカからやって来て、農村や都市で、絵描きや靴屋、鍛冶屋の職人組合で、軍隊で、港で、あるいは乳母、教師、小姓、荷車引きとして働き、のちには独立戦争でたたかい、さらには独立後のメキシコの為政者にまでなった、何千もの男性や女性、子どもたちに歴史的な負債があるからである。そして三つ目が、今日のメキシコにおけるアフリカ系民族集団自身が、自らの発展のための公的支援の対象として認められるよう要求しているからである。

ここではアフリカ系の人々に言及するさいに、「ネグロ（黒人）」や「モレーノ（浅黒い人）」などの代わりに「アフリカ系afrodescendientes」という用語を用いている。この用語は、アメリカ大陸におけるアフリカ人とその子孫らの奴隷化や歴史的な貢献に注意を喚起するもので、同時に、人種差別のスティグマに満ちた肌の色や外見にはなるべく言及しないためでもある。2011年1月、メキシコ・オアハカ州コスタ・チカ地方のチャルコ・レドンドにおける会合において、ゲレロ州とオアハカ州のアフリカ系共同体の人々は、研究者や国の代表者、国際組織の同席のもと、憲法においてその存在が承認されるよう訴えていくために、「アフリカ系メキシコ人ネットワーク」を立ち上げることを決定した。この会合では「アフリカ系メキシコ人」と自称することも決議された。

メキシコにおけるアフリカ系の人々 メスティーソ化と差異

メキシコには多くのアフリカ系の人々や共同体が存在する。そのうち、例えばゲレロ州のコスタ・チカやオアハカ州の一部地域では、歴史的背景はさまざまだが、例えば肌の色や髪の色など身体的な特徴

や、食べ物、祭り、音楽、伝統薬のような文化的側面が際立っている。この地域のいくつかの共同体では、自らの過去が正当に評価され、自らを「ネグロ」や「アフリカ系メキシコ人」共同体として認知されるようたたくグループができています。一方、アフリカ系としての身体的特徴があっても、なぜそのような外見なのか関心をもたず、自分たちの祖先がアフリカから来たことを知らない人々もいる。ミチョアカン、グアナフアト、ケレタロ、サカテカス、ユカタン、ハリスコの各州の住民がこのケースに当たる。さらにベラクルス州のいくつかの村では、アフリカ系文化の影響が顕著に見取れるところがある。これは植民地時代にアフリカ系の住民が居住していたことと、200年以上前の19世紀から現在に至るまで、カリブ地域と近く、文化的関係があったためである。

歴史上、アフリカ出身の人々の集団にはさまざまな性格のものがあったが、これは先住民族やスペイン人との相互関係のプロセス、すなわちそれぞれの地域でのメスティーソ化（混血）の仕方の違いと関係がある。アカプルコやベラクルスの港などは、アフリカ人やその子孫らによって建設され、彼らはこれらの街に欠かせない要塞を築き、兵士として働き、商店を経営し、海運業を営んでいた。ほかの地域、例えばモレロス州では、アフリカ人やその子孫らは製糖工場で働き、地域の先住民族と密接に交流した。メキシコシティやプエブラ、モレリアなどの都市部では、彼らは当時「ネグロおよびムラート」と呼ばれ、職人組合に加盟し、鍛冶屋、絵描き、建築技師、建築職人、商人などとして働き、また御者や洗濯屋、乳母として家事労働にも従事していた。

植民地時代にアフリカから強制的に連行されてきた人々だけでなく、別のグループが19～20世紀にメキシコに到来する。例えば、ハイチやサント・ドミンゴから来た人々が19世紀初めにユカタンに上陸した。同じく19世紀、コアウイラ州にマスコゴ人が、20世紀初めにカリブ人労働者が到来した。また20世紀末から現在に至るまで、アフリカ人やアフリ

カ系の人々は、アフリカ、カリブ、中米、さらにラテンアメリカ各地の国々からやって来ている。

ゲレロ州とオアハカ州のコスタ・チカ地方

コスタ・チカ地方は、太平洋側平野部に位置し、南はアカプルコから北はウアトゥロコまでの地域を指す。

コスタ・チカ地方にアフリカ人が来たのは、メキシコの征服時代にさかのぼる。スペイン人やクリオージョ(新大陸生まれのスペイン人)に従って、副王領時代、奴隷や解放奴隷の人々がこの地域に、おもにカカオや綿花の栽培、牧畜を行う大農園をつくるためにやってきた。時がたつと、奴隷だった人々の多くは解放され、農場の監督や荷車引き、漁夫、牧場労働者となり、周辺地域のアフリカ系逃亡奴隷とともにこの地域の海岸沿いに住み着いた。

さまざまな事情により、この地域の先住民族は人口が減り、生産性が低く交通の便の悪い地域に追いやられた。一方、アフリカ系の人々は海に近い肥沃な土地に住み着くようになった。徐々にこの地域にアフリカ系の人々が中心となる村が増えていった。彼らは「ネグロ」や「モレーノ」、またこの地域独特の呼び方で「プリエト」とも呼ばれた。

現在この地域では、住民グループ間の交流は日常的にさかんに行われ、地域内でも、また他の州に向けても人の移動は活発である。近年では大都市や外国、とくにアメリカ合衆国への移民が増えている。

先住民族もアフリカ系もメスティーソも、この沿岸地域に広く分散して居住しており、山裾から平野部、平地、湖や海岸まで、農村部もあれば都市もある。アフリカ系の大部分は社会サービスが普及せず、過疎が進み、開発が遅れた農村部に暮らしている。近隣の先住民族やメスティーソの人々も状況は同様である。

経済活動の中心は、自給のための農業と、トウモロコシ、マンゴー、レモン、コプラ、ゴマ、パパイヤ、スイカなどの大規模栽培である。ほかに重要なものとしては、漁業と牧畜、そして観光関連のサー



④飼葉桶のファンダンゴと呼ばれるダンス
⑤死者の日に踊られる「悪魔のダンス」の仮面

ビス業だが、家計の大きな柱となっているのが、移民した家族からの送金である。

この地域に特徴的な慣習は、各グループ間の歴史的な交流を反映して、雨乞いをする山のような聖なる場所、聖人、宗教行事などは共通している。同時にそれらのなかには、より先住民的なものやアフリカ系的なもの、というように、それぞれのグループに独自のものとされるものもある。

コスタ・チカでは、長きにわたる交流と変遷の中で再構築されながらも、歴史学者や人類学者がアフリカ起源の特徴をもつとみなす文化的な実践がいくつもある。飼葉桶のファンダンゴと呼ばれるダンスは、馬や牛などの動物をデザイン化した模様で飾られた台の上で男女のペアが裸足で踊るといものである。そこでは手や棒で打ち鳴らすカホンなどの打楽器が用いられる。

また死者の日に踊られる「悪魔のダンス」では、研究者らがアフリカ系とみなす楽器が用いられている。「ボテ」と呼ばれる楽器は、ヒョウタンを太鼓の形にし、真ん中に細い棒を取り付けたもので、トラの吼え声に似た音を出す。また、ラバのあごの骨を用いたリズム楽器の「チャラスカ」も同様である。

そのほかのアフリカの伝統を汲んでいる可能性のある文化的な実践では、「ソンプラ」や「トノ」と呼ばれる儀礼、伝統薬があり、また「レドンド」と呼ばれる家屋もある。これはゴンサロ・アギレ・ベルトランが1950年代に記録しているが、今日ではまったく使われなくなった。

1990年代以降、この地域にはかなりの数の社会組織がつくられ、コスタ・チカのアフリカ系住民の存在と貢献の再認識を求め、また生活水準の改善を訴えてきた。その結果、地域の共同体や研究者、公的機関の関心を集め、アフリカ系の人々の生活条件を改善するための施策が採られるようになった。

そのひとつが、アフリカ系の人々に関するメキシコで初めての博物館の開設である。1995年ゲレロ州クアヒニクイラパに開設したアフロメスティーズ文化博物館は、コスタ・チカの人々が自らの歴史と起源、そして自分たちの文化的表現の特徴を知るために役立っている。

アカプルコとコスタ・グランデ

コスタ・グランデと呼ばれるのはゲレロ州のアカプルコからシワタネホに至る地域で、ここもアフリカ系住民が多く暮らす地域である。

16世紀以来、アカプルコの発展においてアフリカ人の存在は不可欠のものだった。奴隷や解放奴隷の人々は、アカプルコの港でさまざまな仕事に就いており、なかでも中国貿易船が人々の羨望的の東洋の産物を積載し、毎年来航していた時代には多かった。港の荷積み人夫のほか、アフリカ系の人々は要塞を警備する兵士としても働いていた。

19～20世紀、アカプルコは独立戦争や革命戦争の歴史的事件の舞台でもあった。20世紀にはこの港街は観光地として発展し、その美しい自然によって世界的に有名になった。しかし観光業の発展はアカプルコのすべての人に恩恵をもたらしたわけではなく、1930～70年代の間に多くのスラムが形成された。観光と地域内外からの人口流入がこの都市を変容させた。それでもこの港では今日もアフリカ系の人々の存在を示す要素を見て取ることができる。

コスタ・グランデのアフリカ系住民は牧畜や農業、漁業に従事し、とくにコーヒーとココナツの栽培をする人が多かった。副王領時代からこの地域の共同体は経済的な格差と大土地所有制に苦しめられ、そのためこの地では1810年の蜂起は圧倒的な

中国貿易船あるいはマニラのカレオン船 16世紀末頃、アジアからアメリカ大陸に向かう海路が確立した。この時期から、毎年大型船がフィリピンのマニラ港からアカプルコに向けて太平洋を渡るようになり、これがアメリカ大陸と東洋を結ぶもっとも重要な交易ルートのひとつとなった。アカプルコからは、ヌエバ・エスパニーア産の銀（延べ棒や銀貨）、染料のコチニール、種子、芋、タバコ、ガルバンソ豆、チョコレートとカカオ、スイカ、ブドウやイチジクの木、さらにスペイン産のワインやオリーブオイルの樽が送られていた。マニラからは、東洋産の奢侈品がヌエバ・エスパニーアやその他の副王領、さらにスペイン本国に向けて輸出された。中国からは絹製の生地や製品（ストッキングやハンカチ、ベッドカバーやテーブルクロス）、中東のペルシャ絨毯、インドの綿製品が送られていた。中国やベトナム、日本からは、扇子、箆、大箱、物入れ、漆塗りの宝石箱、櫛、鈴、屏風、ペン立て、磁器など。インドネシアの島々やジャワ、セイロンからは、香辛料、とくにクローブ、コショウ、シナモンが運ばれた。ほかに東洋から運ばれたものとしては、ラクダの毛、蝋燭、象牙細工(宗教的彫像)、藤製品、ヒスイ、琥珀、貴石、木材、コルク、アコヤ貝、真珠貝、金属片、スズ、火薬、中国産の果物。さらに、とくにモザンビークから、奴隷にされた人も連れて来られた。

支持を集め、ガレアナー族をはじめこの地域から多くの独立運動の指導者が輩出した。

コスタ・グランデの習慣や文化的実践のなかには、ゲレロ州の太平洋沿岸のほかの地域と共通する特徴をもつものもある。例えば、湖や海での漁業の重要性や、ライフサイクル上の伝統行事、守護聖人の祭り、民間行事などは共通である。また家屋の外に台所をつくる習慣、干し肉の利用、結婚式や葬式の様式も共通している。葬式は楽隊とともに飲み、祈り、泣きながら湖に沿って行進するというものである。興味深いのは、この地域では非常に一般的な「トゥバ」と呼ばれる伝統的なヤシ酒である。このヤシ酒はフィリピンから中国貿易を通じて伝えられたものと考えられている。しかしこれはアフリカ西部および中部の多くの文化で今日も伝統的につくられているものでもある。

ベラクルスもまたカリブ

ベラクルス州には、とくに州の中部および南部にアフリカ系の人口が非常に多い。そこではこの地域でのアフリカ人やアフリカ系の人々の貢献が見て取れる文化的な表現が数多くみられる。例えば、コヨリージョなどのカーニバルの祭り、ソタバントのハローチョと呼ばれる音楽、ダンス、料理があり、さらにマンディンガ、マトサ、モソムボアといった村の名はおそらく昔のパレンケ(農場などから逃亡した奴隷らが集住した場所)から来たものと考えられる。ベラクルスは16世紀から今日に至るまでカリブ地域の一部であった。そのため地域一帯でアフリカ系の人々との間で密接な交流があったのである。

ベラクルスは植民地時代、ヨーロッパとの交易のための公認港であり、ヌエバ・エスパニーニャへの中心的な入り口だった。ヌエバ・エスパニーニャに奴隷として連れて来られたアフリカ人の大部分は、この港に入った。この地域に留まった人々ばかりではないが、多くは州内のコルドバやハラパの砂糖プランテーションやソタバントの牧場に働きに行かされ、また都市部での家事労働者として送られ、さらに黒人連隊の兵士とされたものも数多かった。

植民地時代に来たアフリカ系の子孫だけでなく、19世紀にはイギリスやフランスの企業を通じて、建設業部門にアフリカ系の自由労働者がやってきた。20世紀初めには、この地域に進出したアメリカ資本の石油会社もまたアフリカ系の労働者を雇用したが、その多くはカリブ地域出身だった。

副王領時代以降、ベラクルスはカリブ地域との交易網の一端を担い、なかでもキューバと常に関係を保っていた。この関係は非常に重要なもので、ベラクルスのアフリカ系の人々、つまりネグロ、ムラート、モレーノと呼ばれる人々の多くは、自分たちはキューバ人の子孫だと主張している。

ベラクルスは先スペイン期から文化的に非常に多様性に富んだ州で、さらに世界に開かれた港を持つことから、奴隷や解放奴隷のアフリカ人、スペイン人征服者や入植者、ポルトガル商人、フランス人実業家、レバノン人移民、ユダヤ人亡命者などさまざまな出自の人々が到来し、交流し、また共住してきた。そうしてこの州の豊かな文化的モザイクを形成されている。

ベラクルス料理はこの地の多様な民族グループの好みとセンスの交流を反映している。例えば、「モゴモゴ」と呼ばれる料理は、ベラクルス州南部でごく一般的に食べられており、その材料や調理方法は地域によってバリエーションがあるが、これはアフリカ起源のものと考えられている。

ベラクルスでは「ネグロ、アフリカ系、アフリカ系メキシコ人」というアイデンティティを取り戻そうという社会組織は発展してこなかった。むしろ文化面、とくに音楽においてカリブ地域に文化的に属

モゴモゴ ソラベント市ラス・イグアナスでの作り方。最初に調理用バナナを少しの塩で煮、石うすでつぶし、それから鍋に入れてラードで炒める。よく炒めてから、砂糖か黒砂糖を加えて甘くする。朝食や午後のおやつにコーヒーと一緒に食べる。サルタバランカでは塩味にし、「マチュコ」と呼んでいる。サン・アンドレス・トゥクストラでは、深皿に入れ、コーヒーをかけて食する。ほかにシナモンを加える地域もある。

しているという考え方が根付いており、ベラクルスにおけるアフリカ人とアフリカ系の存在への再認識が行われてきた。

コアウイラのマスゴ

マスゴは19世紀半ばにメキシコに来たアフリカ系の人々のグループである。その共同体はコアウイラ州ムスキスのエル・ナシミアントと呼ばれる場所にある。この集団の別のグループは「ブラック・セミノール」と呼ばれ、アメリカ合衆国のテキサス州のブラケットヴィルなどに住んでいる。

17世紀終わりから18世紀初めにかけて、白人アメリカ人が所有するサウスカロライナ州やジョージア州、アラバマ州のコメや綿花の農場で働いていた多くの奴隷がフロリダに逃亡した。そこは当時スペイン王国の支配下で、奴隷たちを解放すると約束していた。そうしてセミノールと呼ばれる逃亡先住民グループと共住するようになった。マスゴはこれらのグループとの交流によって生まれた民族である。

セミノールや「黒人シマロン」(植民地時代に用いられた言葉で、逃亡奴隷を野生動物にたとえた呼び名)の共同体は、トウモロコシ・インゲン豆・カボチャなどを栽培する農業に従事し、家畜や馬を飼い、鹿を狩り、漁業に従事し、さらにカヌーでフロリダの島々やバハマ諸島、さらにキューバまで行き、鹿など動物の毛皮や干し魚、蜂蜜、熊の脂などをタバコやコーヒー、ラム酒や砂糖と交換していた。

1818年と1858年、アメリカ合衆国南部の住民と(先住民とアフリカ系からなる)セミノール人の間で激しい抗争が起きた。アメリカ人らは逃亡奴隷を捕らえ、新たな逃亡を阻止しようとしていた。同時により肥沃な土地をわがものにしようという意図もあった。この抗争の結果、セミノール人とマスゴ人はオクラホマなど別の州の先住民居住地へ移動し、フロリダの領土はアメリカに併合されることになった。

この間にメキシコはすでに独立を果たしており、奴隷制は禁止され、北の国境をアパチェ先住民に属するリパン先住民やコマンチェ先住民の侵入から守る必要があった。このような状況のもと、セミノール人のリーダーらはメキシコ政府と接触を図った。キカプ先住民とセミノール人、マスゴ人は1850年、メキシコ領内で政府と協定を結び、国境に警備のための詰め所を設けることと引き換えに土地と住まいを得た。

1850年にメキシコに来たのち、セミノール人はリオ・ブラボに沿いのコロニア・ゲレロと国境南部のサラゴサに、マスゴ人はピエドラス・ネグラスの近くのエル・モラルに定住した。これらのグループの中心的な役割は遊牧先住民の「侵入」を阻止することだった。1851年末、彼らの働きに報いるため、コアウイラ州のより内部に住むことが許され、エル・ナシミアントに4つの牛の放牧地が与えられ、今日まで彼らはそこに暮らしている。そこはコアウイラ州の石炭生産地域であるムスキスの街から32キロの場所にあり、ナシミアント・デ・ロス・ネグロスと呼ばれている。

大部分の家族は農業に従事し、とくにトウモロコシ、インゲン豆、麦の栽培を行い、つい最近までサトウキビも栽培していた。また牛や羊の放牧を行っている。この人々は地元では乗馬に長けていることで知られている。マスゴはまたコアウイラ州のほかの経済分野でも活動し、テキサス州のブラック・セミノール人と社会的・商業的な交流を活発に行っている人々も多い。

他の集団と同様に、マスゴの人々もほかの社会グループと日常生活を共有しており、どの習慣が本

アフロセミノール マスゴの人々が話す言葉はアフロセミノールと呼ばれる。これはクレオール英語のひとつで、アメリカ合衆国のカリフォルニアやジョージア州の沿岸の島で話されるガラ語が混じったものである。語彙は基本的に英語から来ているが、文法的にはアフリカやネイティブ・アメリカンの言語、さらにおそらくスペイン語もその基盤となっている。

来の彼らのものなのかは区別しにくい。老人たちは今も彼らの言語である「アフロセミノール」を話しており、祭礼のときには村の女性たちが集まって手拍子を打ち、アカペラで歌うのは、アフリカ系アメリカ人のゴスペルやスピリチュアル（黒人霊歌）に似ている。

祭礼の際には、テタプン（サツマイモのパン）、ソスケ（トウモロコシのアトレ＝甘い粥状の飲料）、ソスケ・ブレッド（揚げパン。ソスケ用に粉碎したトウモロコシを混ぜたトウモロコシパン）といった伝統的な料理が用意される。



テタプン(サツマイモパン)の作り方

材料: サツマイモ1/2袋、小麦粉4カップ、砂糖5カップ、溶かしラード4カップ、クローブ1握り。

作り方: 生のサツマイモを皮付きのまますりおろし、さらに石うすでクローブを加えて挽く。器に小麦粉、砂糖、溶かしラード、サツマイモを入れて混ぜる。全体がまとまり、やややわらかいペースト状になるように混ぜる。炭火で予熱し、油をひいた焼き型に流し込み、平らになるようにならす。焼き型にふたをし、全体に火が回るようにふたの上にも炭火を置く。弱火で10時間近く焼いて出来上がる。

メキシコにおける今日のアフリカ系の人々

20世紀を通じて、多くはないとはいえかなりの数のアフリカ出身の人々がメキシコにやって来た。1973年頃、ルイス・エチェベリア政権時代、いわ

ゆる「第三世界」の国際社会同盟に参加し、セネガル人に修復技術、造形芸術、建築学を学ぶための奨学金を支給した。これらの学生の多くは専門職に就き、メキシコに定住した。またさまざまな状況からコンゴ、ギネア、ベニンから学生や政治亡命者として人々が到来した。

アフリカ系の人々は中米やカリブの国々からもメキシコに来ている。その大部分はアメリカ合衆国に向かう移民だが、その一部がメキシコに定住する。メキシコに定住したアフリカ人やアフリカ系の人々は家族を形成し、アフリカ系メキシコ人の新たな世代をつくっている。

アフリカ人やアフリカ系の人々の歴史的な存在や新たな移民は、メキシコ各地においてアフリカ系以外の人々の間にもさまざまな日常的な文化的表現に深い影響を与えてきた。ラテンアメリカにおいては、これらの表現のなかには、例えばサンテリアやカンドンプレのようなアフロアメリカ系宗教もあり、レゲエ、クンビア、サルサといったアフリカ起源のダンスや音楽、アフロキューバ系やアフロブラジル系のダンス、カポエイラなどが挙げられる。

メキシコにはどれだけのアフリカ系の人々がいるのか？

歴史の長きにわたって、メキシコでは人口を数えるうえでさまざまな基準が用いられてきた。年齢と性別が重要な指標となったこともあれば、職業、婚姻の有無、宗教が重視されたこともある。

例えば植民地時代には、時代や地方や、作業を担当した司祭や書記の判断によって人口統計には様々な用語や方法が用いられた。16～17世紀の間、一般に社会グループを「インディオ」「ネグロ」、

「スペイン人」などに分けていた。この時期にはまた、メキシコではメスティーフ化として知られるグループ間の交流の産物である住民を指して「理性の人」や「カスタ」というカテゴリーを用いていた。この時代の出生や婚姻、死亡の証明書から、植民地時代の人口の特徴についての情報が読み取れる。また公証人記録、住民名簿、地域の統計、この時代の

年代記作者の計算の中にも、さまざまなグループに関する数値がある。

アフリカ人とアフリカ系の人々の人口の重要性を最初に指摘したのが、ゴンサロ・アギレ・ベルトランだった。植民地時代のさまざまな記録の数値を分析し、少なくとも16～17世紀にはアフリカ系人口は、ヌエバ・エスパーニャで(先住民に次いで)2番目に大きな割合を占めていたことを示した。

メキシコの独立後、各民族の違いを登録することは禁止され、すべての住民はメキシコ人とみなされると法律に定められた。しかし1890年頃のポリフィリオ・ディアス政権下で行われた国勢調査では「人種」を問う項目があり、入管書類にも人種に関連する表記が用いられていた。

1990年代、アメリカ大陸における先住民民族やアフリカ系民族のもっとも重要な要求のひとつは、国に支援を要求し、自らの社会的・政治的要求を満たすという目的のために、信頼できる人口統計が必要だということだった。このような必要から、国勢調査の中に、例えば国内にどれだけの数のアフリカ系の人々が暮らしているのかを知るための質問項目が入れられている。

この話題については激しい議論がある。身体的特徴によって人を区別することのリスクとは関係なく、統計調査は絶対必要だと考える人もいる。だがその一方で、このような統計を取ることの難しさを指摘する人もいる。ブラジルやアメリカ合衆国などでの経験から見ても、このような統計調査は、役立つどころか、身体的外見に基づいた集団を「人種化」という大きな問題を作りかねないのである。

技術的な発展により統計データを取得することは容易になったが、身体的外見のような側面だけによることなくアフリカ系の人々の人口を登録し、分類するための基準についてまだ研究の余地がある。統計調査によって得られる情報も重要だが、もっとも肝心なことは、メキシコ社会の過去と現在の構築におけるアフリカ人とアフリカ系の人々の重要性を歴史化する、すなわち認識し識別するということである。(訳：山本昭代)

[http://www.conapred.org.mx/userfiles/files/TestimonioAFRO-INACCCS\(1\).pdf](http://www.conapred.org.mx/userfiles/files/TestimonioAFRO-INACCCS(1).pdf)

グアテマラ 伝統的なピクビル織り

石川智子



グアテマラは、色に溢れている。真っ青な空と強い太陽の下、鮮やかな色とりどりの民族衣装を身にまとったマヤの人々の姿は、何とも魅力的である。

女性たちは今日も、数本の棒を組み合わせただけの後帯機で、その地の自然や動植物などを緻密に織り込み、村により異なる美しい織物を生み出し続けている。

そのなかで、異彩を放つ、真っ白な薄物のウィピル（貫頭衣型のブラウス）を織る地域がある。北部アルタ・ベラパス県のコバンを中心とする、一年を通して雨が多く温暖な、マヤ・ケクチの村々である。

綿の極細糸で織られるこの布は、ガーゼのように薄く軽やかで、風に揺らぎ、陽に透ける。

平織りの白地に、山や動物、鳥、人などの伝統的な模様を同じ白糸で織り込んだ「ピクビル」と呼ばれる織りで、ケクチ語で「くちばしでついばむ、指先でつつく」ことを意味する。繊細で清楚な、優美な織物である。

その織りの工程は、高い技術と膨大な時間を要する。

㊦ 経糸をアートルに漬ける。アートルは、人々にとっても重要な飲み物。聖なるトウモロコシの飲み物を、これから織る糸に捧げて飲んでいただく。

㊧ 絞った経糸を後帯機にかけて整える。糊のついた湿った糸を1本ずつ離し、幅の寸法に均等に配分する、根気のいる作業。何本もの糸が束になったまま乾いてしまうと、離すときに切れたり糸をいためるので、手早く行わなければならない。織り手は向こうに立っている女性で、手前の少女はお手伝い。こうして少しずつ織りを覚えていく。

㊨ 指先に経糸を引っ掛けて模様糸を織り込み、織り針の先でついでに経・横の糸を整える「ピクビル（＝ついばむ、つつく）」と呼ばれるゆえん。

極細の綿糸は、軽く引っ張るだけで切れてしまうので、整経後の経糸（たていと）をアートル（茹でたトウモロコシを挽いて溶いた重湯）に漬けて糊付けし、強度を与える。

その後、まだ濡れている糸を後帯機に整えるのは、二人がかりの作業となる。この段階ではお天気も重要。雨の日は糸が乾かないので、熾き火を下に置いて乾かしながら織り始める。太陽の強すぎる日は、乾きが早すぎて糸が切れやすい。

糸が細かい分、織り進むのに時間がかかる上、糸の扱いは常に細心の注意を要する。

その織りははじめも終わりも、経糸を切らずに織り切って、四辺を耳にする。織物に詳しい人たちから高く評価される、大変高度な技術である。

しかし、ピクビルを着るケクチ女性は減っている。織る女性も減っている。

ある村で、74歳の現役の織り手女性が話してくれた。

「私が若い頃はこの村でもピクビルを織っていたけれど、今は誰も織っていません。手間を掛けて織っても、それに見合う代金を払う人がいないもの。売れるのは安価なもの、売れるものを織らなければね」

現在この村では、もう少し太い糸で、模様を入れた平織りと羅（振り織り）を組み合わせたものが織られている。このタイプのウィピル1枚を仕上げるのに要する時間は約10日、ピクビルなら1カ月はかかる。

紗や羅の振り織りも、繊細で美しい、この地方の伝統織物である。最近の傾向として、経糸・横糸とも2本取りでざっくりと織ったものが多いのは、織りにかかる時間が短縮される分、値も下げられて売りやすいから。

しかし現在のケクチ女性が最も多く着ているのは、薄手の綿や化繊布を縫製したウィピル型ブラウスで、透け透けの華奢なレース布のものも好まれている。どの村の市場でも、色とりどりの安価なブラウスが山積みにして売られている。

ピクビルは、織るのも売るのも容易ではなく、存続を危ぶむ声も聞かれるが、その織り手60名を集めるグループ、イシュバランケが、コバンの村にある。

村で活動していた米国人ボランティアを訪ねてきた旅行者たちから、織物を絶賛されたことがきっかけとなり、「この織りを評価してくれる人たちに積極的に売っていこう」と、外の世界に目を向けた。

品質管理についての研修に参加して、寸法を測ることから学び、村の生活には存在しない、ショールやカーテン、テーブルセンターなどの新しい製品も開発してきた。観光地の高級民芸品店などにも卸している。「注文した規格に合っていない」と製品を付き返されて泣いたこともあるとか。

リーダーのアマリアさんは、流暢ではないスペイン語で様々な話をしてくれる。「どんなに気をつけていても、経糸が切れたり、うまく織れないことがあります。そんな時は天の力が働いていて、どうしようもないんです」



ピクビル織りの代表的模様

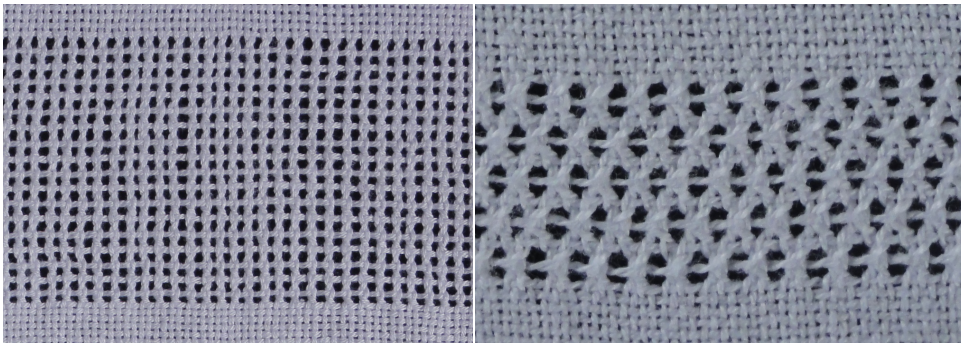
上段は「山」 山と谷、森、道、トウモロコシや雨の粒（六角の輪）を表している。ケクチの人々にとって、山と谷の主であるツルタカという神様は特に偉大な存在。

中段は「鹿」 今ではほとんど見られなくなってしまった。この地域で使う織り針も、昔は鹿の骨で作られたが、現在は牛の骨を使っている。

下段は「パカヤ・ヤシの葉」 セレモニーや大切な集まりの場の飾りとしてよく使われる。花を食べる。



アヒル模様を入れた平織りと紗織りを交互に配したウィピル。前後とも裾が耳になっている。ケクチ地方では、長方形の布3枚を縫い合わせるが、2枚で仕立てる地方も多い。



㊦ 前ページのウィピルの写真の紗織り部分の拡大。経糸を振って横糸を通す、振り織りのひとつ。
㊧ この地方でよく見られる、もうひとつの振り織り、羅織り。

自分の努力だけで何でも思い通りにできると思ったら大間違い、ということらしい。

「織りながら食べたり飲んだりしてはいけません。何か食べたいときは、まず織物にそれを捧げ、それから自分もいただきます」

彼女の話聞き、織る姿を見ていると、織りが神聖な行為であるように感じられる。土を耕し作物を育てることとの共通性も見える。

自然に対する畏敬の念、その恵みへの感謝、慈しみ、自分たちの手を通してこれを織りに映し出し、身にまとう。なんという豊かさだろう。

伝統を重んじつつ、新しい世界に果敢に挑戦する姿勢は頼もしく、美しい。（2014年10月）

表紙写真 イシュバランケ代表のアマリアさんとショールの数々。色糸で伝統模様を織り込んだ薄手のショールは、彼女たちが考案した、ピクビル織りの新しい製品。女性用のブラウスやワンピースを作ったこともある。この日、1才の息子のシャツを仕立てるために織り上げた布も見せてくれた。次は男性用のシャツも作ってみたい、と言う。（彼女の着ているウィピルの襟ぐりには、縫製後に刺繍が施されている）

グアテマラの現在の政治状況について

2014年9月にレコムのグアテマラ視察を行いました。その時にNGO安全と民主主義（SEDEM）の代表イドゥビーナ・エルナンデスさんに現在のグアテマラの状況についてインタビューしましたが、以下はその報告です。

2013年のジェノサイド裁判

内戦中のジェノサイドについて、その最高責任者であったリオス・モント将軍に対し歴史的・画期的な有罪判決が下りたが、これが不法に覆されてしまった。（この裁判については「そんりさ」143号参照）この判決が覆されたのには財界が大きな役割を

果たした。ジェノサイドは軍が単独で行ったものではなく、財界が自身の利益を守るために、軍事政権に資金を提供し後押ししたものである。裁判開始当初は傍観していた財界が、自分たちに火の粉が降りかかるのを心配して妨害活動に乗り出結果と言える。これは同時にグアテマラで実際に権力を握っているのが誰かを誇示したとも言える。彼らはその気になれば、行政、立法、司法にも影響を及ぼす。その中心グループが、グアテマラを経済支配するG8（アグリビジネス、金融、製糖、セメント、酒造、不動産などの8家族）である。

資源開発をめぐる紛争

前政権からクリーンエネルギーへの転換方針が打ち出され、特に中～大規模の水力発電計画が積極的に進められている。土地問題などをめぐり、周辺コミュニティとの紛争を起こしているのは、鉱山開発も同様である。最近の事件では以下の二つがある。

モンテ・オリーボ アルタ・ベラパス県モンテ・オリーボ村近くで水力発電所建設が計画されているが、今年8月半ば、反対派住民に対し暴力的な強制排除が行われた。動員された警察1500人の中には、警官の制服を着た軍兵士もあった模様。同時に、近隣の村で電気代の法外な請求に抵抗してきた地域リーダー2人が盗電の疑いで逮捕され、これを阻止する住民と機動隊が激しく衝突した。住民3人が超法規的に殺害され、多数の負傷者や逮捕者が出た。

警察による違法な暴力行為などをインターネットで報道したオルターナティブメディアは、その後直接的な脅迫を受けている。(次ページ参照)

ラ・プーヤ グアテマラ県北東部で、鉱山開発に反対する住民が重機の搬入を阻止して非暴力的な道路封鎖を2年余り継続してきた。今年5月末、警察は住民を暴力的に排除して重機を通らせ、現在も企業関係者の安全を確保するため常時警備に当たっている。すでに開発は始まり、川の流れが変えられて、畑が涸れるなどの影響が住民に出ている。

19世紀末から輸出用コーヒー栽培を推進する過程で、大土地所有制が強化された。南部海岸地帯には綿花(既に消滅)やサトウキビ、東部にバナナのプランテーションが開かれ、現在は東部から北部森林地帯にサトウキビやアブラヤシのモノカルチャーが広がり続ける。鉱山開発や水力発電も、同様に、土地を奪い住民を排除しながら、進められてきた。そして不満や反対を抑えるために軍事力が投入され、軍と財界が結託してきた。

こうした地域の多くは、組織犯罪(武器の密輸、人身売買、麻薬)の活動地とも重なる。政府はこれを抑えるために軍を派遣していると言うが、その地域で住民の反対運動を抑え込むためにも出動させている。犯罪組織と結託している軍人も多い。退役軍

人も、コフラディア(諜報活動エリートのグループ)上層部を形成し続けたり、現役軍人との関係をつなぐシステムもあり、権力を保っている。

現大統領は元軍人で、政府治安維持関連機関の役職者10人中8人に元軍人をあてており、事実上の軍事化が進んでいる。

現政権は、財界の利益を守ることを『約束』している。水力発電所や鉱山開発の反対派に警察や軍を差し向けて弾圧することも、ジェノサイド裁判他の重要な成果を上げてきた人権派の検事総長を、任期を不当に短縮して交替させたことも、財界の要求に応えてのことだといえる。

この10月には、最高裁判所および控訴裁判所の全司法官が5年の任期を終了して交替する。現在新しい司法官の選出作業が行われているが、さまざまな圧力が働いており、司法機能強化プロセスの後退が懸念される。

人権活動家に対する超法規的殺害や拷問、脅しなどの攻撃も増加している。今年1～8月で785件、年間で1000件を超える見込みである(前年は670件)。

このように状況は厳しいが、希望もある。テリトリーを守るためのコミュニティの闘いが強化されており、女性の参加も増えているからだ。『Buen vivir(良く生きる)』を実践するためのエンパワメントが進められている。

CICIG(国連支援による、不処罰をなくすための国際委員会、2007年～)の活動も、再び活発になっており、司法強化に役立つだろう。

モンテ・オリーボにおける暴力的強制排除の問題

今年8月のモンテ・オリーボ村(アルタ・ベラパス県コバン市)における強制排除について、なぜこれ程に深刻な事態に発展してしまったのか、オルターナティブメディアの情報を参考に、経緯を見てみたい。(主にCentro de Medios Independientes <http://cmiguate.org/>を参照)

モンテ・オリーボはマヤ・ケケチ農民の村だが、この地に、土地を囲い込む農園主が現れ、その後水力発電計画が降って湧いた。

2008年～2010年

イドロ・サンタ・リタ社（以下HSR社）が水力発電所（25MW）建設許可を取り、シャラハ農園（モンテ・オリーボの北10km）に建設用地を購入。

CEDERというNGOが現れ、住民に貯水タンクや学費など援助を申し出つつ、「水力発電は働き口と開発をもたらす」と計画受け入れの説得にかかる。このために地域が分裂し始める。

20の村の住民が連名で建設反対の請願書を県知事に提出する。が、回答はない。

2012年

2月、HSR社は工事を開始。住民はHSR社と交渉し、重機を撤退させる。

3月、モンテ・オリーボ村に軍駐屯地が設置され、HSR社とCEDERが資材や食糧を提供。翌月、住民は軍に掛け合い、これを撤退させる。

8月、住民は市長に、計画の再検討、環境・住民への影響評価、住民への協議を要請。回答なし。市は翌年の予算配分からこの地域を除外する。

2013年

2月、シャラハ農園一部に、反対派グループが簡易住居を建てて占拠する。これを2月9日村と命名。

3月、HSR社は道路修繕を名目に、重機を建設用地に搬入する。

6月、HSR社から解雇された約50人が抗議行動を起こし、重機を焼く。

8月、武装3人組が反対派リーダーのチェン氏を誘拐しようとし、住民がこれを阻止。

同月、コバン訪問中の米州人権委員会先住民族担当が視察。チェン氏他住民代表が状況を訴える。同日モンテ・オリーボでは、HSR社に雇われた男（隣村住民）がチェン氏の家族を銃で脅して発砲、2人の子どもが重傷を負う（2人とも後日病院で死亡）。住民は犯人を捕らえ、引き渡すべく当局に連絡するが誰も来ないまま、犯人はリンチされ死亡。

11月、シャラハ農園主他が、住人5人を銃で襲撃し、住居を破壊する。

12月、HSR社に雇われた男が、モンテ・オリーボ住民4人を刃物で襲撃。

2014年

4月、シャラハ農園主息子他が2月9日村を襲撃、5人が負傷。（内1人は後日病院で死亡）

7月、政府、HSR社、推進派住民が、発電所建設と20年間の運営で合意、調印する。

8月、2月9日村の強制排除が行われる。膨大な数の警官が動員され、広範な地域で住民と衝突。警官による催涙弾や銃の発砲、違法な家宅侵入、住居破壊、暴行などの暴力が振るわれ、住民3人が殺害され、負傷者多数、逮捕者50人あまりを出す。

計画にあたり地域住民の意思は全く考慮されず、認可後も住民への説明は行われていない。企業は一部住民を買収し、そのために推進派と反対派が対立、住民同士の衝突が日常となっている。反対派への暴力的攻撃は執拗で挑発的。企業は反対派にアジテーターを送り込みもする。当局は反対派の訴えには耳も貸さず、企業側の言い分だけで反対派を犯罪者に仕立てている。政府は紛争が深刻化するのを放置した後、機動隊や軍を動員して暴力的に抑え込む。政府の言う『対話』は見せ掛けで、何が何でも計画を実施させる構え。どれほどの犠牲を出そうとも、企業の利益を守る。

これは過去から現在のグアテマラ各地で展開される水力発電、鉱山開発、モノカルチャー栽培などの、どれにも共通している状況と言えるだろう。

内戦中、チショイ水力発電所（275MW）の建設にあたり、バハベラパス県リオネグロの住民440人が軍により虐殺された。（遺族や移転者への補償は現在まで行われていない）サンマルコス県のマルリン金鉱山は、2004年から採掘を開始、住民の根気強い抵抗運動や国内外からの非難、人命を含む甚大な犠牲を払いながら、現在も採掘は続いている。

すでに各地に存在する紛争が深刻化し、新しい計画がさらに紛争を生み出す可能性を孕んでいる。計画段階で、社会的インパクト評価を実施し、関係コミュニティの真の参加を実現することが必要だ。

キューバ映画の魅力

～キューバ映画祭inサッポロに携わって

都築仁美（キューバ映画祭inサッポロ実行委員会）

キューバ革命50周年にあたる2009年から取り組んできた「キューバ映画祭inサッポロ」の活動を、今年9月の上映会を最後に締めくくった。この原稿を書きはじめるほぼ1週間前に終了したばかりなので、まだまだ振り返るといふ心境にはなれないけれど、意義のある、楽しい活動だった。

担い手となった実行委の主な面々は、札幌市に住む会社員、教員、NPO職員、キューバ関連のお店を営む自営業者などで、キューバ革命やチェ・ゲバラに好意的関心を寄せる市民活動家もいれば、政治にはあまり関心がなく音楽など芸術の魅力に惹きつけられた人、無類の映画好きなど多様なのがとても新鮮だった。そのメンバーと一緒に取り組んできた映画祭の上映作品を中心に、キューバ映画についてご紹介したい。

キューバ映画は、革命後にはじまったといっても過言ではない。革命後のキューバでは、良くも悪くも国家が、ICAIC（キューバ映画芸術産業庁）という組織をつくり、映画を推進してきた。映画が革命を推進する道具の一つになると考えたからだ。映画をみることなど、おそらく想像することさえかなわなかった貧しい暮らしを送る山村の人たちのもとへ、重たい上映機材を担いで出掛け国内外の良作をみせたのはICAICだし、革命後のキューバ国内でキューバ人監督によるニュース映画や劇映画が盛んにつくられるようになったのもICAICがあってこそだ。そこでは革命の希望を謳いあげる作品はもちろんだが、時が経つにつれて表現の自由に対する抑圧が進む中で、抗うようにして、社会批判的な視点を持つ自由を希求する作品も数多く生まれた。そういった作品の中には、世界的に高い評価を受けているものも少なくない。

なかでも『低開発の記憶』（1968年）は、キューバのみならず、ラテンアメリカ映画最高傑作の一つともいわれている。『苺とチョコレート』（1993年）や『バスを待ちながら』（2000年）などで知ら



れるキューバの名匠トマス・グティエレス・アレアの代表作で、革命の熱気が醒めないミサイル危機前後のキューバを舞台に、熱狂する人々や政治状況に対して、主人公が抱く冷めた思いや、社会的・精神的閉塞感、革命の副産物ともいえる家族の離散などが、貴重なドキュメンタリー映像を交えながら描かれている。キューバ革命をキューバ人の目線で批判的に描いた見応えのある作品だ。日本語字幕付きDVDが入手できるし、同名の原作も野谷文昭氏の翻訳で2011年に出版されている。

アレア監督は『12の椅子』（1962年）『ある官僚の死』（1966年）も日本語字幕付きDVDが販売されており、いずれもユーモアと風刺にあふれる名作である。ぜひご覧いただきたい。

ところで、自分で紹介しておきながら、はなはだ無責任だと思うけれど、『低開発の記憶』は、私にとっては少々難解で馴染みにくい作品だ。一方、先にあげた『苺とチョコレート』は、私にとってはキューバ映画不動のNo.1だ。革命を信奉する大学生ダビドと、自由を求めるゲイの芸術家ディエゴが主人公である。2人の友情と葛藤に、キューバ革命の理想と矛盾が表現されている。ディエゴを演じるホルヘ・ペルゴリアがとてもステキなのだが、それがこの映画の魅力を増加している。こちらはインターネットを通じてレンタル可能な作品なので、まだみていない人はぜひ！

アレア監督の作品ばかり紹介してしまったが、スペイン植民地時代、独立戦争時、革命直後と異なる時代を生きた3人の女性たちをヒロインにして描いたウンベルト・ソラス監督の大河ドラマ的長編『ルシア』（1968年）も、日本語字幕付きDVDが発売されている。歴史的な意義も深く、フェミニズム的視点からもたいへん面白い作品である。

このように個人で日本語版を入手することができる作品以外にも、札幌では様々な映画を上映してきた。『ビバ・キューバ』（2005年）『ハロー・ヘミングウェイ』（1990年）といった日本の配給会社がついたけれど、広く公開されることのなかったキューバ人監督による良作もあれば、『キューバ音楽の歴史』（2009年）や『チコとリタ』（2010年）のように、キューバの魅力にとりつかれた外国人監督によるものもある。この2作はラテンビート映画祭で上映されたが広く公開はされていない。いずれも素晴らしくステキな映画である。

また、札幌での上映のために日本語字幕をつけた作品もある。たとえば、今もキューバ人に愛されているミュージシャン、ベニー・モレの半生を描いた『エル・ベニー』（2006年）。そして、今年上映した『セルヒオの手記』（2010年）などである。

『低開発の記憶』の続編といえる『セルヒオの手記』＝写真＝は、キューバの若手監督ミゲル・コウーラによる作品だ。近年のキューバでは、ICAICの枠組みにとどまらずに、自立して自由に作品を生み出そうとする監督が少なくない。『セルヒオの手記』は、そのような監督によるものの一つで、国内外の数多くの映画祭で上映され、20以上の賞を受賞している一方、某国で開催されたキューバ映画祭では、キューバ政府から上映を控えるように言われたといういわくつきの作品である。

チェ・ゲバラをスーパーマンになぞらえたことを役人に咎められ、それを機会に米国へと亡命した作家セルヒオが主人公である。彼の様々な女性との関わりと、高度消費社会である米国への違和感、米国そしてキューバ双方の「正義」への批判、キューバへの郷愁や完全には捨てきれない革命への希望などが描かれている。映像に織り込まれた雑誌のコラージュ、アニメーション、古いドキュメンタリー映像などに風刺が強烈に効いていて、見応えがある。



この『セルヒオの手記』については、東京で上映される可能性が高い。決定次第、キューバ映画祭のサイトで紹介するので、ぜひ情報をチェックしてほしい。また、せっかく字幕をつけた作品なので、東京に限らず、ぜひ他地域でも上映してほしい。関心のある方はぜひご連絡を！（この作品以外にも上映をしてみたい映画があれば、多少なりとも力になれると思うのでご遠慮なく。）

最後になるが、キューバ映画祭に携わった5年ほどの間に、長編・短編合わせて30作を超える映画を上映してきた。決して多いとは言えないかもしれないが、同じ国の映画をいくつもみることで、その国やそこに生きる人々の様々な姿が垣間見えてきた。当たり前のことだけれど、どこの国や地域にも、ステレオタイプな情報からでは捉えることができない多様さや複雑さがある。私にとってキューバは、日本とは異なるオルタナティブな可能性を持つ場所の一つだが、映画をみることで、キューバ革命への憧憬も、批判も、安易に語る事が出来なくなった。革命の理想は真実である一方で、政治・経済・情報・表現の自由に対する人々の願いと現実との矛盾もまたキューバの真実の一つであると思う。キューバ映画は、その2つの真実の両方を、制限された表現の自由の中で切実に描いているからこそ魅力的なのかもしれない。札幌でのキューバ映画祭の活動は締めくくったけれど、その魅力からは逃れられそうもない。

cubafilmfes@gmail.com
<http://cubafilmfesstaff.blog129.fc2.com/>

今から1年ほど前、うちの子どもが5歳になる少し前に、引っ越した先の近所にある空手道場を覗きに行った。子ども向けにもなっていたので、家に帰って「空手でもやる？」と聞いてみると、「あの、やあっ!!というやつ？」と、手足のジェスチャーを交えた返事が返ってきた。それだよ、と言うと、「うん、うん」と、これは面白いことになったとでもいう顔つきで、喜んで行くこととなった。

初日は空手着はもちろんもたずに行ったのだが、子どもは形から入りたかったらしく、ちょっと悲しいような恥ずかしいような顔をしながら、でも、幸いもう1人、やはり空手着なしの、様子見の初日の子がいたため、とりあえず、一緒にグループに入った。1時間のクラスが終わって一応気に入ったらしい。というのは、その様子見に入ったもう1人の子は、途中で抜けて帰ってしまったからである。やっぱり、子どもの時からこういったことの好き嫌いはあるらしく、うちの子は、どうやらこういうことが好きらしい。そろそろ1年になるが、行きたくなーい、とぐずることはあまりなかった。むしろ、先月からは、もっとやりたいと、2クラス取ることになった。

空手を始めて面白かったのは、結構日本語を使うことである。もちろん、微妙に発音が違ってちょっと違和感があるけれど、「始め!」の掛け声から、「1、2、3、4..」、構えや型の名前も日本語だ。

うちの子はニカラグア生まれのニカラグア育ちで、私以外の日本人とはほとんど接触がない。3カ月の赤ちゃんの時からこちらの保育園で朝から晩まで過ごしていたため、あまり日本語は覚えてくれなかったので困っていたのだが、どうやら空手のお陰でちょっと、日本語にも興味が出たようだ。空手を初めてから間もない頃、ある日シャワーをしながら日本語で数を数えていたら、いつもは10までで、それ以上の数字は何度言っても覚えなかったのに、今度はいきなり100まで到達してしまってびっくりした。興味を持つか持たないかの問題だと言うことが分かった。

まあ、空手で使う単語以外は、相変わらず日本語を敢えて覚えようとはしていないけれど、ひらがなやカタカナや漢字に触れる機会が増えたのは幸いだ。道場



に「訓」と書きたいいくつかの簡条書きがあるのだが、その1番「人格形成に努ること」を先週から、ぶつぶつぶつぶつ言って暗記している。先生に教わったらしく、「ジンカクケイセイニソトムルコト」と、微妙に発音が悪く、意味を教えてもまだ理解できる年ではないため、意味があるかどうか分からないが、とりあえず、あの文は漢字とひらがなで出来てるんだ、と言うことがわかったことだけでも進歩である。

もう一つ面白いと思ったのは、雑巾がけである。日本人なら、雑巾がけは腰を鍛えるのに肝心、ということを理解できると思うのだが、私の思い込みだろうか? ここでは、クラスの後やる時とやらない時がある。日本人の私としては、毎回やれ!! と思ってしまうのだ。そして、何ととっても、こちらはモップ文化なので、雑巾がけの姿勢がなっていないことに、日本人としてさらに憤慨してしまうのだ。こちらのテレビで時々「空手キッズ」の映画が放映されるのを見たことがあるのだが、あれを見ても、日常の何でもない動作が、意外にも武術では重要だったりする、ってことがあると思うのだが、特に武術はほとんどやったことない私ではあるが、雑巾がけはしっかりやって欲しいところである。

ちなみに今年の5月に、隣の COSTA・リカからも先生が3人来て、進級審査が行われた。うちの子も、何とか白から黄色にはなれたから、励みにはなった。これからは、そんなに簡単には進級できないと思うけれど、まあがんばって続けて欲しい。(2クラスは月謝もバカになりませんが…)

第72景 マヤ人の佇まい

グアテマラは、マヤ系先住民族が圧倒的多数派なのに、マヤ人が団結できないため政権をとれない。私は遠い彼方の異邦人であるが、長らく絶望感を抱いていた。とりわけボリビアでアイマラ人のエボ・モラレスが選挙で勝って大統領になってからは、グアテマラの状況が醸すもどかしさが一層募っていた。コナビグアのロサリーナ・トゥウクをはじめ、さまざまな世論指導者に現地や東京で会うたびに「なぜですか」と訊き質していた。回答はおしなべて次のようなものだった。「為政者から22もの言語集団ごとに分断統治されてきて<単一のマヤ民族などない>と教え込まれ催眠術にかけられた結果、団結できないまま21世紀に至ってしまった。無教育や貧困ゆえに選挙のたびに買収されるマヤ有権者も少なくない」

ところが視点を変えると、別の解釈が可能になる。茨木大学教授の青山和夫は次のように説く。

「メヒコ南東部から中米に至るメソアメリカのマヤ地域は、プレイスパニカ時代を通じて政治的に統一されたことはなかった。統一王国はなく、地方色豊かな諸王国が共存していた。このことは、<統一王国=文明>という見方への反証となる」。つまり、スペイン人の侵入、混血ラディーノ誕生の後、分断統治が始まったのではなく、それ以前からたくさんの自治王国があって、それゆえに敢えて言えば「自ら分断統治していた」ということになるのだ。

では、なぜ統一王国ができなかったのか。青山は、陸上での輸送と移動は徒歩に依っていたため、熱帯雨林や高地の激しい起伏が障害になって、相互に遠距離地域と結びつくのは困難だった、と指摘する。各王国は基本的には、歩いて運べる距離の範囲で主食の玉蜀黍（トウモロコシ）など重くかさ張る食糧や生活物資を自給していた。その結果、諸王国は適度な距離を維持しつつ分散して独立するようになり、広域の統一国家は

できなかった。青山は、「諸王国は、社会の多様性を保って、社会の回復力を高めた」と見ている。ただし、遠方の王国間での婚姻関係はあったという。

マヤ遺跡を象徴するのは壮麗なピラミデだが、青山によると、「マヤ低地は比較的平坦なので、マヤ人は神聖な山を必要とした。マヤ人は自然の山を崇拝した」。ピラミデは、人口の山、聖地だった。諸王国の王たちは、権勢を表わすため巨大な神殿を造った。特に旱魃で食糧難に陥った時など、神々の助けを請うため、一層壮大な神殿を建てた。重力にそむいて空に向かうピラミデなど石造大型建築物のある古代文明を私は「垂直の文明」と名付けてきたが、建築機械のない時代の大規模建築は人力に頼るしかなかった。それによって王国社会は衰退する。青山は、「不要な<公共事業>が衰退を招いた。巨大化した神殿ピラミデは、マヤ文明の黄昏期の始まりを象徴していた」と言い切る。

しかし、統一王国がなく小王国が数多くあったため、マヤ文明全体が滅びることはなかった。マヤ文明が持つ多様性の強みであり、昔からの居住地域に800万人のマヤ人が30ものマヤ言語と文化を維持しながら今日生き続け、その人口は増え続けている。青山は、このマヤの教訓を「画一化する現代社会が学ぶべき今日的意義」と捉えている。

グアテマラの政治をマヤ人が支配できないのを見るのは悲しい。だがメソアメリカ全体を見渡せば、異なる視界が開けてくる。白人とラディーノが中心の「グアテマラ統一政府」は、内戦終了後も、新自由主義の乱開発や人道犯罪無処罰などによってマヤ人を痛めつけている。だが一方で、マヤ人は悠久の生き方をしている。20世紀後半に36年の殺戮の内戦を生き延びたこの民族のサビドゥリアは、いつか必ずや少数派の白人・ラディーノをも包含する融和国家をグアテマラに築き上げるに違いない。【参考文献：『マヤ・アンデス・琉球』（青山ら4人の共著、朝日新聞社、1400円）】

白いハトがやってきたら…

伊香祝子

今回は、アルゼンチンの民話に登場するメツゴシエ (Metzgoché) というヒーローをご紹介します。メツゴシエはアルゼンチン北東部パラナ川流域に暮らす先住民コム (Qom) の伝説にたびたび登場する人物です。

アルゼンチンに先住民…というのと驚かれる方も多いかもかもしれません。全人口にしめる先住民人口が1.7% (約60万人 2005年国立統計局統計) という数はたしかに少なく見えます。しかし、2011年にアルゼンチンを訪問した当時の国連特別調査官アナヤ氏は報告書のなかで、統計の取り方次第では200万人にのぼる可能性も指摘しており、複雑な背景を感じさせます。

話を元に戻すと、コムはアルゼンチン北東部からパラグアイ、ボリビアに広がるグラン・チャコ地域を中心に暮らす先住民の一集団で、アルゼンチンにはおよそ4万7千人 (05年の統計) が住んでいると言われています。そのコムの人たちのあいだで語り伝えられるメツゴシエとはどのような人物なのでしょう？アルゼンチン出身の作家・人類学者コロンプレスの『アルゼンチンの神話上の存在たち』によれば、メツゴシエには大きく分けてふたつの人物像があります。

ひとつめのメツゴシエ像は、コムの子神“Kata”が人類を作りだした時、最初に地上に送った男性で、あとから送られてきた男たちに、釣りや狩りの方法を教え、はちみつの採集法や弓矢、網の作り方などを伝授したそうです。また、家の建て方や、山や水辺に潜む危険性について、動物たちから教わったことなども彼らに伝えたと言われています。もうひとつのメツゴシエ像は、ヨーロッパ人との接触の歴史が織り込まれたもので、チャコの他の民族や、コムにやってきたキリスト教徒たちと闘ったというものです。現在のコムに土地が含まれる北東部のフロンティアは、19世紀末から20世紀の初頭にかけてアルゼンチン領に編入されていくのですが、伝説のなかの「キリスト教徒」は、アルゼンチンでは独立の英雄と目されている軍人サン・マルティン (1778-1850) に率いられた人々を指しています。

私がメツゴシエの名を知るきっかけとなったのは、一昨年亡くなったアルゼンチンの児童文学者グスタボ・ロルダン (1935-2012) の『先住民たちが語ったお話』というお話集です。チャコ生まれの彼の作品には、機知に富む動物たちが主人公の物語が多いのですが、このお話集は、ロルダンが、北東部の先住民コムのほか、グアラニ、ウィチ (かつてはマタコと呼ばれていた) の人々のお話を書き記したものです。

そのなかの一話「白いハトが飛んで来たら」は、「自分の土地で暮らすことは、簡単にはいかないことだ」という文で始まります。メツゴシエと彼の仲間たちは、ベルメホ (パラナ川の支流の一つ) をさかのぼり、遠い「ブエノスアイレスと呼ばれるところ」から来た白人たちと、自分たちの土地を守るために弓矢や槍をとって何度も闘います。馬を自在にのりこなすメツゴシエは、向かうところ敵なしの強さで、どんな銃弾も彼を倒すことはできませんでした。しかしあるとき、大きな船団に、武装したたくさんの兵士と大砲を積んでやってきた白人たちを見て、メツゴシエはこの戦いに勝ち目がないことを悟ります。そして、「上官の命令に絶対服従で、自分の頭で考えることをしない」白人の指導者と交渉を始めたメツゴシエは、最後まで抵抗しようといいつのる息子や他の人びとを「抵抗し続けるためには生きつづけなくてはならない」と説得し、仲間の安全と引き換えに自分が人質となると申し出ます。牛の皮に包まれ、船に鎖でしばりつけられたメツゴシエは川の中を引かれていくのです。いつか彼らの村に白いハトが飛んできたら、それは自分が死んだという意味だ、と言い残して。物語の最後は、「白いハトはまだやってこない」と結ばれます。

このようなできごとは昔の話ではありません。遺伝子組み換え大豆が主要な輸出品として広く栽培されるようになったこの20年近くのあいだに、アルゼンチン北部では農地を拡大するため、さまざまな手段で先住民の人たちの土地が奪われています。そんなニュースを聞くたびに、メツゴシエはいまも必要とされていると、私は感じるのです。

参考文献

Colombres, Adolfo “Seres mitológicos argentinos” Emecé, 2000

Roldán, Gustavo “Cuentos que cuentan los indios” Alfaguara, 1999

Chiaranello, Fabián “La soja desaloja” SURsuelo 20, nov. 2011 <http://sursuelo.blogspot.jp/2012/11/la-soja-desaloja.html>

ペルー沿岸音楽界の相次ぐ訃報

今年に入って、ペルー沿岸部の音楽文化を牽引してきた素晴らしい音楽家たちが相次いで亡くなっている。時間が立てば立つほど、彼らのいなくなったその穴の大きさをひしひしと感じるばかりだ。もう彼らの歌を、ギターを聴くことはないのだと思うと、胸がかきむしられるような気持ちに苛まれる。ペルーの輝ける音楽史の中で彼らが築いた一つの時代が今まさに終わろうとしている。

この春、3人の非常に素晴らしいペルーの音楽家が亡くなった。そして夏にはさらに2人のかけがえのない音楽家がまたこの世を去った。一人は、3月25日に52歳で亡くなったペペ・バスケス。アフロペルーを代表する歌手であり、フェステホの父ポルフィリオ・バスケスを父に持つまさにアフロペルー音楽のロイヤル・ファミリーを代表する歌手であった。

また4月5日にはラ・プリメラ・ギターラ・デル・ペルーと尊敬の念を込めて呼ばれたオスカル・アビレス(90)が、そしてさらに5月4日には彼と活動を共にしていた名歌手パンチート・ヒメネス(94)が亡くなったとの知らせが走った。ムシカ・クリオーヤの黄金時代を牽引した偉大な音楽家たちの相次ぐ訃報は、多くのムシカ・クリオーヤを愛する人々に大きな悲しみをもたらした。

そして8月4日にはアフロペルー音楽復興の牽引役であったビクトリア&ニコメデス・サンタ・クルス姉弟の甥で、カホン奏者としても名高かったラファエル・サンタ・クルス(53)が亡くなった。そしてその後を追うように8月30日にはビクトリア・サンタ・クルスも91歳で亡くなっている。

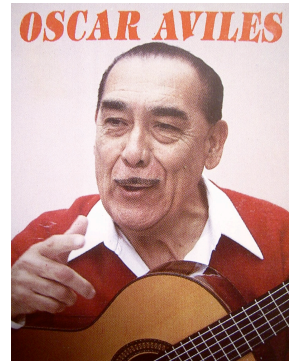
この相次ぐ訃報に、ふとサンボ・カベロの訃報のあと、続くように彼をムシカ・クリオーヤの世界へと誘ったフェルナンド・ロリが亡くなったことを思い出した。このような訃報の連鎖に、その魂のつながりの強さを見出すのは哀しみでしかないけれども、それでもそこに彼らの生きてきた日々の足跡を強く再確認させられることも確かだ。今回は、本当にかげがえのない音楽家であった彼らの活動とその時代を振り返り、今は亡き彼らの足跡をたどってみたいと思う。

ペルーのムシカ・クリオーヤで、まだカホンが不可欠な楽器となる以前、その時代からムシカ・クリオー

ヤを牽引してきたのがパンチート・ヒメネスとオスカル・アビレスだった。バリオ(下町)の民衆音楽だったムシカ・クリオーヤが、ラジオやレコードなどを通して音楽市場で流通する新たな音楽へと転換しつつあった20世紀前半期より、黄金期となった50年代以降も継続して、彼らはその第一線で活躍し続けた。中でも伝説的コンフントとも言えるフィエスタ・クリオーヤは、この時代最も愛されたコンフントの一つであった。57年に結成されたこのコンフントは、パンチート・ヒメネスとオスカル・アビレスに加えてウンベルト・セルバンテスやアリスティデス・ラミレス、ペドリート・トーレスといった素晴らしいメンバーによって、数々の名演を残している。パンチートの張りのある声にオスカルの艶のある絶妙なギターが絡み、テンションを否応なくアップにさせるカスタネットが打ちならされる。そんなフィエスタ・クリオーヤの演奏は、今なおムシカ・クリオーヤのコンフントスタイルの最高の演奏の一つとして語られている。

フィエスタ・クリオーヤの解散以後も2人の関係は親友として有名であったが、その後は一緒にコンフントを結成することはなく、それぞれが独自の演奏活動を展開した。パンチート・ヒメネスはソロ歌手として活躍し、中でもヘスス・バスケスとのデュオのアルバムなどが高い評価を得た。一方、オスカル・アビレスはその後もトリオ、ロス・モロチューコスで活躍した後、サンボ・カベロやルシーラ・カンボスといったアフロペルー音楽の歌手たちをバックアップしスターへと引っ張りあげたり、チャブーカ・グランダと数々の名演を残すなど非常に精力的にムシカ・クリオーヤ業界を牽引し続けた。

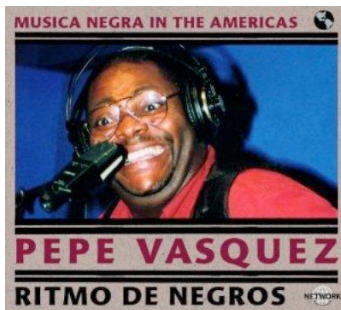
アフロペルー音楽の分野では、ニコメデスと共にアフロペルー音楽の復興のまさに中心となって活躍したビクトリア・サンタ・クルスがこの8月末に亡くなった。ニコメデスがクマナナなどのアフロペルーの詩と音楽のグループを結成したものを、実際にプロの



集団としてのクオリティにまで仕上げたのはビクトリアの功績だとも言われている。さらに数多くのアフロ舞踊のスタイルを確定し、サマクエカなど新たな舞踊の創作もしながら国立舞踊団の座長も務めたまさにアフロペルーの踊りの礎を築いた人である。では彼女が踊りだけの人かといえば、歌も非常に素晴らしく、決して多くはない録音ながら彼女の残した歌の数々は今なお名演として愛されている。



そして世代が一つ下がったアフロペルー界のプリンス、ペペ・バスケスは、アフロペルー文化復興運動の中心人物であったニコメデス・サンタ・クルスの師匠、ポルフィリオ・バスケスを父に持ち、兄達も名だたる音楽家としてアフロペルー音楽を牽引していった、まさにアフロペルー音楽の名門中の名門一族の歌手だ。伝統をしっかりと押さえつつもいち早くアフロペルー音楽にサルサなどのイディオムを導入するなど、新しい要素を大胆に取り込みながらアフロペルー音楽の普及に尽力してきた。中でも彼の歌う「ヒビハイ」(「蛍の光」のフェステホ版)や父のことを歌った「ライセス・デ・フェステホ」などは、ペルーを代表する一曲として今なお愛され続けている。それだけに52歳という若すぎる訃報が辛い、晩年は糖尿病に苦しみ、足の切断以降は調子を崩していただけに、アフロ音楽家を取り巻く糖尿病問題の難しさを痛感するばかりだ。



そして、サンタ・クルス姉弟の甥っ子として次世代のアフロ音楽の牽引役として活躍していたラファエル・サンタ・クルスのまさかの53歳での訃報も衝撃的であった。役者として活動もしながら、カホン奏者として、またアフロ文化研究者として精力的に活躍していた最中であった。また彼は、オクタビオ・サンタ・クルスと共にロス・エルマーノス・サンタ・クルスとしてレゲエやブルースなどを取り込んだアフロ

ーション音楽も積極的に発信するなど伝統と革新の双方に力を注ぎ続けてきた。

アフロペルーの新たな時代を切り開いてきた中堅世代を牽引する二人が相次いで亡くなったことのショックは大きく、伝統の復興に力を注いできた第1世代とはまた異なる第2世代だからできる新たなアフロペルー音楽との関わり方、その音楽の可能性の広げ方などを模索してきた彼らを悼む声やイベントが数多く催された。

ペルーのムシカ・クリオーヤとアフロペルー音楽を作ってきたパンチート・ヒメネスやオスカル・アビレス、ビクトリア・サンタ・クルスらは90歳を越えての大往生なので、ついに来る時が来たか、というある程度の受け入れ準備というか、諦めもあったが、ペペ・バスケスやラファエル・サンタ・クルスの突然の訃報は私も本当にショックが大きかった。ペペ・バスケスは脚を切断後、かなり弱ってしまって、同じく脚を切断したルシーラ・カンボスが激励したというニュースなども出ていたので、まだそういう覚悟はラファエル・サンタ・クルスよりは出来てはいたが、それでも52歳、まだまだこれから復帰もあるだろうと思っていた最中だった。その数日前にはオスカル・アビレスと一緒に歌ったりしていたようで、YouTubeのそのビデオを見るたびに大好きだった彼の歌声がもう聴けないということが信じられない思いだ。

近年の黄金期のムシカ・クリオーヤやバリオに残る古い民衆音楽としてのムシカ・クリオーヤの発掘/再評価運動が盛り上がっているのも、こうした世代の最後の生き残りの音楽家たちの歌を聴き、また学び、残せる最後のタイミングであるということを痛感した人々によってさまざまな企画が行われてきたからだ。そういった危機感によって、長らく音楽活動から遠ざかっていた古老たちの歌声が蘇った例もたくさんあるが、それでもその歌声がついにまたひとつ、またひとつと失われたニュースに接するたびにショックを受ける。しかし、ラファエル・サンタ・クルスやペペ・バスケスと共に活躍してきた数多くの中堅若手世代のムシカ・クリオーヤとアフロペルー音楽の音楽家たちが、これからのペルー音楽をしっかりと盛り上げていってくれることは間違いはない。胸に去来する寂しさばかりは、なかなか拭い去れないものではあるが、新しい世代が何を歌い、表現していくのか、今はそちらにも注目しながらこれからのペルー沿岸音楽の未来に思いを馳せることとしたい。(水口良樹)

牛肉のタコス

TACOS DE CARNE DE RES

今回は日本でもおなじみの、とても簡単な料理です。作り方を紹介する前に、材料についてちょっとだけ説明したいと思います。

まずは牛肉です。

昔のアメリカ大陸には牛はいませんでした。500年余りにヨーロッパ人によってアメリカ大陸にもたらされると、またたく間に大陸中に牧場が形成されました。

それによって、チーズやバター、クリームなど、牛乳を原料とする多くの製品が作られました。

現在、チーズやバターはメキシコ料理でふんだんに使われています。牛を知らなかったマヤ文明の子孫も牛肉を活用するようになり、メキシコ料理はさらにおいしく華やかになっていきました。

今回つかう牛肉以外の材料は、インゲン豆、アボ



カド、ハラペーニョ、小麦のトルティーヤ、トマトソースです。

今回の料理は簡単で安価でおいしいので、家族や友達と集まるときに最適です。私の実家でも、ちょっとした集まりのたびにつくっていました。

.....

■材料 4人分

- ・牛挽肉 400グラム
- ・オールドエルパソカラコステニャ、あるいはその他のメーカーのインゲン豆の缶詰 1缶
- ・熟したアボカド 1個
- ・サワークリーム 1箱 (90cc)
- ・小麦粉のトルティーヤ 16枚
- ・レモン 1/2個
- ・塩
- ・ウスターソース 大さじ5杯
- ・薄切りのハラペーニョ
- ・タマネギのみじん切り 大さじ2杯
- ・トマト中 1個

■作り方

- 1) フライパンで牛肉を炒め、色が変わってきたらウスターソースを加えて、よく混ぜる。

- 2) アボカドの皮と種を取り除き、ビニール袋に入れて、ペースト状になるまでつぶす。袋の端っこに穴をあけ、深皿にアボカドのペーストをよそう。アボカドの実をフォークでつぶしてもよい。

トマトを刻んで、アボカドのペーストに加える。レモンは種を取り除いたあと果汁をしぼる。塩で味をととのえ、よく混ぜる。

- 3) 缶詰のインゲン豆に少々の水を加えてミキサーにかける(多少のとろみが残る程度に)。タマネギのみじん切りをフライパンで軽く炒め、色が変わりはじめたら、ミキサーにかけたインゲン豆を加える。弱火にして、焦げないように気をつけながらよく煮込む。
- 4) トルティーヤを4枚ずつビニール袋に入れて、電子レンジで30秒ほどあたためる
- 5) あたためたトルティーヤを1枚ずつ平皿に置き、牛肉とアボカド、インゲン豆をのせ、ティースプーン1杯分のサワークリームをかけたらできあがり。

フードセキュリティを脅かす中米の干ばつ

グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスなどの中米諸国はここ10年干ばつの被害を受けている。今年も深刻な干ばつがあり、トウモロコシや豆など収穫に大きな影響が出た。エルニーニョ現象のために今年末にはさらに悪化する見通しだ。太平洋の海面気温が上昇し、それが南米では大雨をもたらす一方で、中米では干ばつをもたらしている。このため280万人以上の人々が飢餓に直面すると予想されている。グアテマラではすでにトウモロコシなど基本食物の価格が高騰している。場所によっては非常事態宣言も出されている。主要産業であるコーヒー生産にも影響が出ており、コーヒー摘みなどの季節労働がなくなれば、さらに経済的な影響が出るだろう。国連の世界食糧計画WFPによれば、グアテマラ、ホンジュラス北部、エルサルバドル西部の280万人の食糧が不足するという。グアテマラ政府は17万人に対し4千トンの食糧を提供すると発表した。だが、WFPによれば100万人に十分な食糧を提供するためには90日毎に7万トンが必要になり、WFPは1万2200トンしか供給できないという。今年の干ばつは1998年のハリケーン・ミッチ以来の大災害になると危惧されている。グアテマラでは2001年と2009年にも深刻な干ばつがあり、深刻な影響を与えたが、これに対応するための長期的な政策はとられておらず、水資源の管理や汚染防止のための法律も整備されていないのが現状。(Noticias Aliadas, 2014/09/08より)

ボリビア 10歳以上の子どもの労働を合法化

ボリビア政府は子どもが労働できる年齢を10歳以上とする新しい法律を公布した。この法律は子どもが働かなければならないボリビアの現実に合わせて子どもを守るためのもので、10歳の子どもが親の監督のもと、学校に通いながら労働でき、さらに12歳の大半は第三者との間で労働契約が結ぶことができるとする。新法では、子どもは正規の労働者と同じ失業保険などが保障されるほか、雇用者は子どもが勉強するため毎日2時間を有給で確保しなければならない。旧来の法律では国際労働機関 (ILO) が定める14歳を労働できる最小年齢としていた。

ユニセフによれば、ボリビアでは50万人以上の子どもが家族の収入を補うために労働に従事している。多くの子どもがラ・パスや他の都市で、屋台で食べ物を買ったり、靴磨きをしたりしているが、厳しい労働環境のもとで、鉱山や大農園で働いている子もいる。エボ・モラレス政権はこの法律はボリビアの極貧を根絶するだろうと述べている。国際労働機関は児童労働の国際法を犯していないかどうか法律を検討中であることを明らかにした。(BBCMundo.com 2014/07/18より)

ラテンアメリカ 貧困層と中流層の中間に位置する脆弱層

最近経済発展を遂げたラテンアメリカは貧困率も約半分に下がった。2000年から12年の経済成長の時代、中流層(日収10ドル~50ドル)は8200万人増え(21→34%)、貧困層(日収4ドル以下)は逆に5600万人減った(41.7→25.3%)。そのどちらにも属さない人々は32.4%から37.8%に増えて、4300万人となっている。が、ラテンアメリカは2013年から発展が伸び悩んでいる。これは米国連邦準備銀行による量的金融緩和政策が変わったこと、中国経済が鈍化して原材料の輸出が打撃を受けたことなどによるものだ。そのために貧困を脱したものの、中流にまではいたらず再び貧困層に落ちそうな「脆弱層」の人々が2億人ほどいるという。地域18カ国を調査した国連開発計画UNDPによれば、人口の38%がこの「脆弱層」に属しているという。経済ブームの時代に構造的な問題(低い徴税率、資本の流出など)が解決されなかったことも低成長で打撃を受ける人々が多い原因となっているという。(BBCMundo.com 2014/09/01, 2014/04/09より)

グアテマラ視察旅行から戻って、2週間が経とうとしています。ン十年ぶりの中南米で、しかもグアテマラは以前に観光で数日立ち寄っただけだったので、ほぼ初めてです。首都に着くと、家々の壁や窓、道路の傷み具合にメキシコシティを思い出してすごく懐かしい気がしました。空港まで迎えに来てもらって、専属？運転手のヘラルドの車で、最初の訪問地グアダルーペ協同組合のあるマヤの小さな村ポアキルへ。その道すがら徐々に目の前に広がっていくマヤ先住民の世界。美しいウイピルとコルテを身につけたマヤの女性が、頭に荷物を載せたまま立ち話をしていたり、子どもを抱いて歩いていたり。小さな女の子の民族衣装姿は、本当にかわいい。マヤカレンダーの絵と全く同じ世界だと、つい見入ってしまいました。次の日、朝早い時間に、ガタガタの山道を車に揺られていると、これから畑に向かう男性にたくさん出会いました。背中に鋤を背負って、つばのある帽子をかぶり、マウンテンバイクにまたがって、穴ぼこだらけの山道を、どんどん進んでいくのです。なんかかっこいいんです。これはカレンダーの絵にはなかったなあ。(大西裕子)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で1月10日(土)、
 発送は京都で1月17日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.149 コロンビア・アワ民族

Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今

Vol.148 ナルコ・メヒコ

Vol.144 ブラジル・家族農業の危機

Vol.147 サパティスタ武装蜂起20年

Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判

Vol.146 グアテマラ視察報告

Vol.142 サパティスタの新しいサイクル

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・

FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

30万7925円

<グアテマラ基金>

16万4519円

(2014年10月現在)